



わたしはこの地に恩を感じていた  
 荒廃した水田を活用して、区民全員が  
 集い憩う場所をつくりたかった

池には水車が回り、鯉や川魚がゆうゆうと泳いでいる。池の周りにはギンショウズの花が咲き誇る。公園横の小川にはカモが愛らしい姿を見せ、訪問者の心を和ませる。ここが元々は、荒れた水田だったとはとても思えない。

【第1章】

# 地域を再生する

荒れた水田を再生し、住民が集い憩う場所をつくろう  
 公園整備に着手した当時を、鈴木俊三さんが振り返る

公園整備当時、ここは人の背丈ほどもある草で覆われた湿地帯だった。120人も地域住民が参加して公園整備は始まった。



ときどんの池は、元々は  
 荒れた田んぼだった

この自然観察公園ときどんの池一帯は、元々は水田だった場所。終戦後まで稲作がされていた土地だ。

「この土地に稲作がされていたころは、景観も環境も保たれていました。ホテルが無数に舞う美しい場所でした。しかし国の減反政策の影響で水田は放棄され、人の手が入らなくなりました。やがて美しくなった景観は、どんどん荒廃し、草が生い茂る湿地帯へと変わっていったんです」と鈴木俊三さんは当時をふり返る。

地元徳山で建設会社に務めていた俊三さん。荒れていく水田を寂しい気持ちで見守っていた住民の一人だ。

「わたしはこの徳山で、地区の皆さんに大変お世話になりました。この地に大きな恩を感じていたんです。いつかこの恩を返すことができたらずっと思っていました」。

公園整備の計画が持ち上がった

そんな俊三さんのところに平成9年、当時徳山区長を務めていた橋本務さんから、公園整備の計画が舞い込んだ。「橋本さんから『水田跡地に公園を整備して、地域住民の憩いの場所をつくろう。ホテルが舞う景観を取り戻そう。俊三君に建設部門の中心を担ってほしい』と言われました。わたしはそのとき、これでこの徳山に貢献できる、恩返しができると考え、即座に『協力します』と、橋本さんに約束したんです」。

公園建設計画は区の役員会で承認され、具体的に整備がスタートした。まず手がけたのが水田跡地の草刈り・井戸

づくられていった。「地区の皆さんの力がなければ、絶対ここまでやれなかったと思います。この公園には、地域の力、地域住民の思いが詰まっています。自分たちが暮らす地域だから、自分たちの手で良くしたい。困難なことにもあきらめず、団結して乗り越えていく。ここはその象徴であり、誇りです」と俊三さんは言う。

地域に愛される公園は、  
 地域の力の結晶

平成12年5月2日、親水池の整備が完了。公園は一つの形を成した。あの日から9年。今では、夕暮れどきに散歩途

中の親子が、池の周りを散策しながら鯉を見て微笑み合う子どもたちがザリガニを捕り歓声を上げる。グラウンドゴルフ場には毎日のようにプレイする仲間たちがいる。そんな住民憩いの場になった。

念願だったホテルの保護飼育も進んでいる。飼育グループが中心となり、研究を重ねてきた。平成12年からは幼虫の放流を開始。少しずつ、幻想的な光が戻り始めている。

当時草が生い茂り、人が寄りつかなかった土地。今では、地域になくならない場所に成長した。住民が必要とし、住民の手でつくり上げた、徳山区のシンボルの一つだ。



ときどんの池 建設部門を担当した  
 鈴木俊三さん（徳山）